

## 論文

## アルゼンチンにおける「第三世界のための司祭運動」

- 「聖」と「俗」のイデオロギー融和の試みと失敗 -

渡部 奈々\*

## はじめに

第二バチカン公会議において初めて、カトリック教会は自らの絶対的真理と信念の主張を放棄し、世俗の方法によってキリスト教信仰を表現することを確認した。また、この公会議以降、カトリック教会は貧しい人々と共に歩むことを選択し、その理念を実践しようという動きが活発になった。アルゼンチンにおいて1968年に誕生した「第三世界のための司祭運動」(El Movimiento de Sacerdotes para el Tercer Mundo 以下 MSTM と表記) もそのような運動の一つであり、ラテンアメリカで最も規模の大きな司祭運動であった。MSTM の構成員は、貧しい民衆の解放と社会正義を求めるカトリック司祭たちであり、時の軍事政権(1966-73年)に対する抗議運動を通じて、民衆からの幅広い支持を獲得した。しかし、軍政やそれに近い教会中枢部との関係は悪化し、彼らはメディアによる誹謗中傷の的となっていく。そして1973年のペロニスタ政権樹立に伴い、MSTM は運動体としての機能を失った。

MSTM 衰退の要因として、軍政からの圧力、司教団との対立、そしてMSTMの組織内分裂

があげられることが多いが、本稿ではMSTM 司祭らが抱えていたイデオロギーの葛藤に着目したい。長きにわたって世俗社会を切り離し、世俗に生きる人々の救済に無関心であったカトリック教会は、第二バチカン公会議を機に自らの姿勢を大きく転換した。教会の内にいた聖職者たちは人々の生きる世界へ出て行くよう求められ、世俗の方法でキリスト教を宣教し、神の御心に沿うよう社会を改革することが推奨されたのである。

この公会議の新しい理念に感銘を受けたアルゼンチンの司祭たちは、当時の人々が信奉していたペロニズムという政治イデオロギーこそが世俗の求める方法であると確信し、それを通して理想の社会を構築することを熱望した。つまり、俗のイデオロギーを用いて聖なるキリスト教の教えを広め、地上における神の国を実現しようとしたのである。しかし、この「聖」と「俗」のイデオロギー融和の試みがMSTMの存在意義を揺るがし、運動の終焉を早めることになったと筆者は考える。

ペロニズムとはファン・ドミンゴ・ペロン(1946-55, 1973-74大統領)が提唱した政治理念かつ政治運動であり、社会正義(労働者保護)

\* 早稲田大学大学院社会科学研究科 博士後期課程6年

と民族主義（経済的自立と自主外交）を軸にしたイデオロギーである。1946年に大統領就任したペロンは1955年に失脚するまで、労働者から熱烈な支持を獲得し、ポピュリストとして独裁的支配を続けた。1955年以降はペロンの不在にもかかわらず、ペロニズムはアルゼンチン社会に影響力を拡大し、ペロンなきペロニズムと呼ばれるマルクス主義的ペロニズムが発展した〔松下 2004: 175; 松下 1987: 158-184〕。こうしてペロン党（1947年成立）内には従来のペロニズムとマルクス主義的なペロニズムという二つの派が存在することとなり、両者がペロン復帰に腐心していたが必ずしも一枚岩ではなかった。詳細は5-1で述べるが、ペロン自身が明確なイデオロギーを持っていなかったことがペロニズムの変質と党内抗争を招いたともいえる。

これまでの先行研究において、MSTMは1960年代ラテンアメリカに隆盛したカトリック革新運動として捉えられることが多かった〔Di Stefano y Zanatta 2000: 513-535; Dussel 1981: 194-198〕。その中でも、MSTMの政治性に着目したダドソン〔Dodson 1974〕は、軍政下の政治的空白におけるカトリック左派の政治運動としてMSTMを分析し、ペロニズムとの関連を考察した点において他の研究と一線を画している。軍政下で反体制運動を先導し、ペロン帰還の道筋を整えたMSTMは、アルゼンチン政治史において一定の役割を果たしたというダドソンの見解はもっともであるが、運動の主体となったMSTM司祭についての考察は十分とはいえない。MSTMが政治的役割を担い得たのは、アルゼンチンにおける政治社会の変化という外的動因に加えて、聖職者としての使命という強い内的動因が存在し、司祭を世俗の政治運

動に駆り立てたからではないだろうか。

本稿ではMSTM設立前から運動が終息するまでの約10年間に焦点を当て、MSTMがいかにしてペロニズムを自らの司祭運動に取り入れようとしたか、そしてその試みがなぜ失敗したのかを検討する。はじめに、アルゼンチンの司祭たちに強い使命を自覚させ、その後の司祭運動の原点となった第二バチカン公会議の理念を概観する。次に、国内における政治社会の変化と、それに呼応するかのようMSTMがペロニズム支持を宣言し、政治化を遂げた過程を見ていく。そして最後に、「聖」と「俗」のイデオロギー融和というMSTMの試みがなぜ失敗に終わったのかを、ペロニズムの変質と、MSTM司祭と一般民衆が求める聖職者像との乖離という二点から分析する。

## 1 第二バチカン公会議

1962年に開催された第二バチカン公会議（1962-65年）は、第一バチカン公会議と同じく、教会と政治社会が一体化していた「キリスト社会」消失後の会議であるが、その方向性は著しく異なっている。それまでの公会議は、教義・典礼・教会法等を審議決定するものであり、カトリック体制の保持・強化に主眼点が置かれていた。トリエント公会議において、ルターをはじめとする改革派によるカトリック批判を一蹴し、第一バチカン公会議で、科学や民主主義を含む近代思想における誤謬を糾弾した<sup>(1)</sup>のは、カトリック教会のアイデンティティである普遍性を再確認し、自らを擁護するために他ならない。しかし第二バチカン公会議では、それまでの護教的・権威的態度は影を潜め、対話を通し

ての一致（カトリック信徒の一致、キリスト者の一致、世界と教会との一致）を図ることが目的とされたのである。

公会議の開会演説において、教皇ヨハネ23世は次のように述べた。「この世界会議が第一に目指す目標は、教会の主要な教えのいくつかを討議することではなく、教父や過去および現代の神学者たちによって伝えられ、当然ここにご列席の皆様が、知っておられる事柄を繰り返すことでもありません。（中略）忠実に守られるべき、この確固不動の教えが、現代の要求する方法で探究され、説明されなければなりません」〔南山大学監修 1969: 333-334〕。カトリック教義そのものを討議するのではなく、それを現代社会においていかに効果的に伝えるかに力点が置かれている。

また、世界の諸現実やそこに生きる人々と乖離を続けるカトリック教会のあり方については、次のように述べている。「誤謬には教会はいつも反対し、時には断固とした厳しさをもって誤謬を断罪しましたが、現代のことについて申しますならば、キリストの花嫁である教会は、人々を厳しく取り扱うよりは、むしろ慈しみの葉を用いていやそうとしています。断罪するよりは、自分の教えの価値を示しながら、現代の要求に応える方がよいと思われます」〔南山大学監修 1969: 334〕。それまで誤謬として否定されてきた近代思想や科学といった世俗の方法が、第二バチカン公会議において初めて福音宣教に有効な手段として認識されたのである。この宣教方針の大転換により、1960年代後半から多くの聖職者が政治に関わるようになり、アルゼンチンの革新派司祭たちはペロニズムという政治イデオロギーに傾斜していったのである。

公会議では17の議題について討議が行われ、最終的には16の文書として発表された。その中で、第二バチカン公会議の中心といえるのが『教会憲章』と『現代世界における教会に関する司牧憲章』（略称『現代世界憲章』）である。『教会憲章』において、教会が自らの本質や存在意義を問い直し、教会の使命は「神との親密な交わりと全人類の一致の道具」（教会憲章一）として世に仕えることであると再確認した<sup>(2)</sup>。そして、現代世界との関わりの中で、教会の使命をいかに果たしていくかを示したものが『現代世界憲章』であり、第二バチカン公会議における最大の成果ともいわれている。

「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、とりわけ貧しい人々と、すべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある」〔南山大学監修 1986: 327〕という冒頭の一節は、『現代世界憲章』を貫く精神を最もよく表しており、教会が現代世俗社会に生きる人々の精神的・物質的苦悩の解決に寄与することを望んだヨハネ23世の意図を反映したものであった。現代世界との対話を通して、カトリック教会が人々に仕えるという最初の意志表明が『現代世界憲章』であり、世界の誤謬を糾弾した第一バチカン公会議の精神とは対照的である。

第二バチカン公会議以降、多くの聖職者たちが「世界」との対話に駆り立てられたが、第三世界の司祭が実際に目にした「世界」とは、人々を取り巻く貧困と抑圧の世界であった。この不平等で非人間的な社会の変革こそが「現代世界の人々に常にいっそう惜しみなく、より有効に奉仕する」〔南山大学監修 1986: 399〕ことであると考えた司祭たちは、より具体的な行動

をとるようになり、それは次第に司祭運動として拡大していった。

アルゼンチンにおける「第三世界のための司祭運動」(MSTM)の最盛期には約800名の司祭が参加していたといわれる。MSTMは特定の政治イデオロギーであるペロニズムを支持し、社会への影響力を強めていったが、これは他の司祭運動には見られない現象であった。彼らは自らの権益のためにペロニズムを支持したわけではなく、ペロニズムこそが大衆運動の鍵であると理解したがゆえに、そのイデオロギーを自らの活動理念の根幹に据えたのである。第二バチカン公会議の宣教方針をアルゼンチン社会に適用しようという司祭らの試みが、MSTMのペロニズム支持という形になって表れたと筆者は考える。つまり、MSTMはペロニズムという世俗イデオロギーを用いて社会を変革し、福音を具現化しようとしたのである。

## 2 MSTM 設立前の社会状況

1960年代、世界は大きな変動を経験していた。自由と解放を求める闘争が各地で起こり、既存の政治体制や秩序は大きく揺らいでいた。キューバ革命の成功はラテンアメリカ各国の革命運動や民族運動に多大な影響を与え、アルゼンチンにおいても社会変革を目指す動きが活発化していた。ここでは、司祭たちがペロニズムに傾倒し、大規模な司祭運動へと発展していく1960年代の社会状況を概観する。

### 2-1 ペロニズムの左翼化

MSTM設立と独特な発展の要因としてあげられるのは、ペロンなきペロニズム現象であ

る。当時、ペロン党再構築の道を模索していた青年党员たちに影響を与えたのがJ・W・クックであった。彼はペロン大統領時代の国会議員であり、ペロン亡命後は軍政に対する抵抗運動を指揮した人物である。革命後のキューバを訪れた際、そこで実践されている社会主義に衝撃を受けたクックは、ペロニズムの再定義に取り組んだ。「労働者偏重のポピュリズム」といわれる従来のペロニズムと大きく異なるそのマルクス主義的思想は、多くの青年ペロニスタ（ペロン支持者の意味）を魅了し、彼らを政治運動へと駆り立てていった。彼らは次第に、ペロニスタ左派としてペロン党内におけるプレゼンスを強め、左翼的な学生や労働者からの支持を獲得したのである。

新しいペロニズムに否定的な古参のペロン党员たちが、ペロニスタ左派の存在を認めるようになったのには理由がある。当時の軍政から厳しい弾圧を受け、政党活動を禁止されていたペロン党にとって、党の再建とペロン帰還の実現が目下の急務であり、そのためには民衆からの幅広い支持が不可欠であった。1955年のペロン失脚後、産業構造転換の失敗からアルゼンチン経済は悪化し、1963年における労働者賃金は5年前と比較して15%も減少していた。人々の間では資本主義に対する批判が高まり、社会主義に傾倒する若者が急増する中、ペロン党が民心を掴むためには党内でペロニスタ左派を承認し、社会主義に対して寛容な態度を示す必要があったと考えられる [Gillespie 1982: 29-31]。

スペイン亡命中のペロンもまた、この新しく誕生したペロニスタ左派に対しての支持を表明し、彼らを激奨する手紙を何通も送っている。ペロン自身から信認を受けた若い党员たちは、

自分たちこそが正統なペロニスタであり、手紙の中でペロンが力説する国家社会主義がアルゼンチンのめざす政治体制であると確信するまでになっていた。そして、一つの党内に対立する二つの派が併存するという奇妙な事態は、ペロンがアルゼンチンに帰国する1973年まで続いたのである。

ペロニスタ左派に属する若者の多くは熱心なカトリック信徒であり、教会の青年グループに所属していた。青年の司牧を担当していた司祭たちが彼らとの交流を通して、人民主権や国家社会主義といったペロニズム左派のイデオロギーに触れたであろうことは容易に想像できる。そして、この司祭たちがのちにMSTMを牽引する役割を担い、ペロニズム支持を宣言するのであった [Burdick 1995: 134-136]。

## 2-2 労働司祭運動

MSTMとペロニズムの関係は、労働司祭の存在を抜きにして語ることはできない。労働司祭は、福音実践のために一般の人々と同じように工場などで働き、生活することを職務としていた。その起源は第二次世界大戦後のフランスであるが、1960年代のアルゼンチンにはすでに多くの労働司祭が活動し、組合運動などにも深く関わるようになっていた。労働司祭の数は150名程度であり、アルゼンチンの司祭総数の約3%とわずかであったが [Turner 1970: 184]、彼らは労働者階級に大きな影響を与え、その活動は後のMSTMを予示するものであった。

また、国内の多くの教区において、スラムで生活しながら司牧活動に従事する若い司祭たちが現れた。スラムで暮らす司祭にとって衝撃だったのが、貧しい人々のペロン崇拜であっ

た。どんな粗末な小屋にもペロンやその亡き妻エバの写真が飾られており、まるで聖人扱いであったという<sup>(3)</sup>。これを見た司祭たちは、カトリック教会に対する民衆の失望の大きさを知った。1954年頃からカトリシズム分離を進めるペロンを危険視し始めたカトリック教会は、離婚法制定、公立学校の宗教教育禁止、教会に対する国家補助金減額といった政教分離政策に踏み切ったペロン政権への支持を撤回した [Gill 1998: 157-160]。これに加えて、工業化政策の行き詰まりによるインフレ悪化が追い打ちとなり、9年余りに及んだ政権はあっけなく崩壊し、ペロンは亡命を余儀なくされたのであった。教会が失った信頼を取り戻し人々と連帯するためには、ペロニズムが不可欠であると確信した司祭たちは、次第にペロニズム支持者となっていった。

このように、カトリック教会の司牧活動は大きく変化していた。しかし「人々と共に生きる教会」という第二バチカン公会議の理念はあるものの、実際の司牧活動に関する明確な指針が示されていないのが現状であった。そこで、司祭による意見交換グループが各地で結成され、新しい司牧活動のあり方が話し合われるようになった。中でも盛んであったのが、ブエノスアイレスの意見交換グループであり、その参加者の多くが後にMSTMのメンバーとなった。

## 2-3 オンガニア軍政

1960年代、アルゼンチン社会におけるカトリック教会のプレゼンスは著しく低下していた。深刻な司祭不足<sup>(4)</sup>や人々の教会離れ、さらには司牧革新を求める司祭と司教団の対立といった問題を抱えるカトリック教会にとって、

1966年に樹立したオンガニア軍政はまさに歓迎すべきものであった。カトリック国粹主義者であるオンガニアは、共産主義の脅威から国家を守るという名目で、国民にカトリシズムを強要し反体制分子を弾圧した。カトリック教会による認知こそが政府の正当性を保証するものであったため、時の権力者たち（民政・軍政に関わらず）はカトリック教会に対して多くの優遇措置を講じるのが常であり<sup>(5)</sup>、オンガニア軍政も同様であった。カトリック教会の復権を狙う教会中枢部はこのイデオロギー政策を支持し、教会と軍部との関係は急速に深まっていった。

しかし、すべての司教が軍政を支持していたわけではなかった。クーデター直後、コリエンテス州のデボト司教は自らの管轄教区において声明を発表し、カトリック教会は福音を自由に宣べ伝えるために国家権力からの独立を保持しなければならないと述べ、70名の司教がこれに賛同した。デボト司教は貧しい人々と同じように生きることを選択し、国家から保証される多額の給与や豪華な生活を放棄した人物であり、第二バチカン公会議の理念に深く共感していた。そして、労働司祭やアルゼンチンでは珍しいキリスト教基礎共同体<sup>(6)</sup>の導入といった、教区内における司牧革新を積極的に行い[Burdick 1995: 113-114]、後のMSTM設立に重要な役割を果たしたのである。

### 3 MSTM 設立と発展

#### 3-1 MSTM 設立

アルゼンチンにおけるMSTM誕生の引き金となったのが、1967年8月に発表された『第三

世界の18人の司教のメッセージ』(Mensaje de 18 obispos del Tercer Mundo以下『メッセージ』と表記)という文書であった。これはアジア・アフリカ・ラテンアメリカの司教18名が第三世界の諸国民に向けて発した声明で、前年に発表されたパウロ6世の回勅を第三世界に適用しながらも、革命に対してより前向きな見解を示した。第二バチカン公会議における東方カトリック教会総主教の発言を引用しつつ、「真の社会主義とは、基本的平等と公正な富の分配のなかでキリスト教精神が完璧な形で実践されたものであることをキリスト者は示さなければならない」(14項)と述べ、社会正義実現に向けた民衆の直接行動を訴えた[ベリマン1989: 17-19]。

『メッセージ』が発表されて数ヵ月後、デボト司教からこの文書を手渡され、非常に大きな衝撃を受けたラモンデッティ司祭は、同僚の司祭らと共にこれを翻訳し、全国の司祭に発信した。翌年1月までに、『メッセージ』への支持と参加を表明した270筆の署名が集まり、その後短期間のうちに400筆に達したことから、『メッセージ』が若い司祭たちに与えたインパクトがいかに大きいものであったか推察できる。この署名キャンペーンの成功により、MSTMは全国的な運動へと発展し、1968年5月には第一回全国大会がコルドバで開催された。この会議で確認されたMSTMの基本理念は書簡という形で、第二回ラテンアメリカ司教協議会総会(メデジン会議)に出席する司教たちに届けられた[Burdick 1995: 138-139]。その書簡はラテンアメリカの窮状を訴え、資本主義構造を非難・告発する左翼的思想の強いものであったが、メデジン会議に出席した急進派司教たちには快く受け入れられたのである。

1968年8月、第二バチカン公会議の決定をラテンアメリカに適用することを目的として、メデジン会議が開催された。この会議で司教たちは、ラテンアメリカ社会における不平等や貧困は「制度化された暴力」（構造的暴力）によるものとし、この現状を「罪の状態」とであると断言した（平和1、16項）。そして、ラテンアメリカに蔓延する社会的不正に対して教会が無関心ではいられないとし、聖職者は貧困者との連帯を強め、彼らの代弁者となるべきであると主張した。この連帯とは「貧しい人々の問題と闘いを自分のものとし、彼らと語り合う方法を知ることである。この連帯は、不正と抑圧に対する批判、貧しい人々が耐え忍ばなければならない耐え難い状況に対する闘いのうちに、具体的に示されなければならない」（教会の貧しさ10項）と確認された。

MSTMはこのメデジン文書を自らの活動の拠所とし、運動のガイドラインを提示した。彼らの主張の要点は、搾取という現状に対する人々の意識化、資本主義や経済的帝国主義による不正の告発、そして社会変革実現のための大衆行動の重要性であった〔Bresci and Concatti 1972: 13〕。そして、全国規模で運動を展開するためにアルゼンチン全土を六つの地域に分け、MSTMは脱中央集権的な組織として活動を開始した。既存の教会ヒエラルキーと異なる組織形態は多くの司祭たちを惹きつけ、MSTMは各地でさらに拡大していった〔Dodson 1974: 63〕。

MSTMが大衆に向けて行った最初の具体的な行動は、1968年12月の静かなる抗議行動であった。これはオンガニア軍政によるスラム撤廃計画に対する抗議であり、大統領府の前で21名

の司祭が一時間無言で立ち続け、スラム撤廃の中止を要請した。この抗議行動は国内の各メディアに取り上げられ、MSTMは一般大衆に広く知られることになった。しかし翌年1月、ブエノスアイレス大司教区において聖職者が許可なしに大衆行動に参加することが禁止され、教会中枢部はMSTMを危険な存在として警戒するようになっていた。

### 3-2 MSTMの政治化とペロニズム支持

1969年5月、コルドバ州においてMSTMの第二回全国大会が開催された。参加者は小グループに分かれ、政治と教会について議論を交わした。メデジン文書を学んだMSTM調整委員会によって準備されたこのテーマには、教会は社会変革において重要な役割を担うべきであるという含意があり、教会が積極的に国家政治に関わっていくことを肯定する視点に第二バチカン公会議の理念が反映されていた。MSTMのメンバーであり、第二バチカン公会議とメデジン会議にアドバイザーとして出席したヘラは、解放の神学についての神学的知識をメンバーに与え、その活動が教義から逸脱することを防いでいた<sup>(7)</sup>〔Burdick 1995: 144-146〕。大会の結論として、国家が革命プロセスの只中であり、革命を推進する力は真の大衆運動であるペロニズムにあることを確認したMSTMは、これ以降公然とペロニズムを支持するようになる〔Seisdedos 1999: 69-70〕。

2で述べたように、MSTMリーダーの多くは以前からペロニズムに触れ、そのイデオロギーを評価していた。しかし、組織としてペロニズム支持を公言するとなれば当然、政治的・社会的リスクが伴ってくる。特に反ペロニズム

を掲げる軍政からの弾圧が強まることは必至であり、保守的なカトリック司教団との関係悪化は一目瞭然であった。それにもかかわらず、MSTMがペロニズム支持を宣言したのは、ペロン自身から信任を得ているという自負が彼らにあり、近い将来ペロンが復権するという見通しがあったからではないだろうか。MSTMに宛てた手紙の中で、ペロンは司祭らが「帝国主義とはまったく異なるイデオロギーを定着させ、同時に誰一人として排除されることなく公正な分配を可能にするための改革」に参加したと賞賛し、「我々の闘争における君たちの参加は大きな励ましであり、徳と価値基準を備えた君たち（聖職者）の貢献が貴重であることを我々は知っている」と述べている<sup>(8)</sup> [Enlace 1971]。

時を同じくして、アルゼンチン全土では学生や労働者による大規模なデモが多発していた。MSTM司祭は全国に広がる反体制グループを支援し、治安軍による抑圧と拷問を告発する文書を発表した。保守的な司教の中には、管轄教区で活動する急進的なMSTM司祭を処罰する者も現れ、軍政は反体制分子としてMSTM司祭を抑圧した。

MSTMの第三回全国大会は1970年5月に開催され、25教区から117名の司祭と3名の司教が出席した。司教の出席は、運動に対するカトリック教会からの支持と監督を意味しており、MSTM存続にとって非常に重要な意味を持っていた。司祭らは世に仕える教会の業の一つとしてMSTMが存在することを切望し、そのために司教団からの承認と支持を必要としていたのである。運動体としてのMSTMは、自らを教会ヒエラルキーに属する司祭集団と位置づけ

ていたが、この大会で決議された「選択の自由」はMSTMのアイデンティティを大きく左右するものとなった。これは、各司祭が自らの良心に従って自由に行動できるというものであり、MSTMが政党や既存の教会組織と異なる運動体であるという主張に基づいていた [Burdick 1995: 150]。しかし、MSTMが組織としての規範や、各構成員に対する拘束力を放棄したこのときから、運動は一貫性を欠いたものとなっていった。

第三回全国大会以降「ペロニズムのための選択」をスローガンに掲げ、左翼化するMSTMに対して、カトリック教会内における圧力は強まっていった。保守的な司教の中には、軍政の治安部隊を利用して外国人MSTM司祭を国外追放する者も現れた [Stefano y Zanatta 2000: 530-535]。そのような状況下で起きた前大統領殺害事件は、MSTM運動の転換点となった。1970年6月、ペロニスタ左派から派生したゲリラ組織モンテネーロスにより、アランブル前大統領が殺害されたのである。事件から2週間後、首都ブエノスアイレスのリーダーであり、MSTM機関紙の編集長であるカルボネ司祭が共犯として逮捕された。首都のMSTM司祭らは、逮捕は軍政によって仕組まれた罠であると非難し、カルボネ司祭の無罪を訴えた [Burdick 1995: 151-153, Seisdedos 1999: 88-89]。

さらにMSTMは、国内における暴力の発生原因と国民の不満について熟慮する必要があると述べた司教団に呼応して文書を発表し、アルゼンチンの問題は政治・経済・社会構造におけるラジカルな変革により解決できると述べた。そして、その変革には民衆の意識化が不可欠であり、民衆自らが既存構造を否定し、新しい世



界を構築する必要があると主張した [Seisdedos 1999: 102-104]。しかしこの事件以降、各メディアは社会を混乱させる共産主義集団として MSTM を非難するようになり、彼らは民衆からの支持を失っていった。

## 4 MSTM 分裂から終焉まで

### 4-1 分裂と孤立化

MSTM が決議した「選択の自由」は、MSTM 司祭と警察、そして司祭と司教間の衝突を増加させ、MSTM 司祭の逮捕は後を絶たなかった<sup>(9)</sup>。1971年に開催された第四回全国大会には、前回よりも多い157名の司祭が出席したが、司教団からの参加はデボト司教のみであった。今大会では「ペロニズムと社会主義」というテーマで議論が交わされ、現状のペロニズムにおける問題点が明らかにされた。ペロンというカリスマリーダーの下で、堅固な官僚主義体制を保持するペロニズムは、そもそも社会主義とは相容れない性質のものであった。一貫性に欠けたペロニズムの政治イデオロギーがペロニズム左派の存在を許容していたが、労働組合幹部が実権を握る元来のヒエラルキー構造はそのまま維持されていたのである。

この大会に欠席したプラスカ司教は、MSTM 支持を表明しながらも、「ペロニズムのための選択」は MSTM が真の民衆運動となることを妨げるであろうと警告した。彼は、ペロニズムがペロン党という政治組織をまとめるイデオロギーであり、そのイデオロギーだけを民衆運動に持ち込むことは不可能であると認識していたのであった [Burdick 1995: 210]。司教の懸念したとおり、MSTM の運動開始当初に謳われて

いた「ペロニズムのための選択」は、この時点で「ペロン党のための選択」となら変わりないものとなっていた。これらの矛盾や問題点を自覚しながらも、多くの MSTM 司祭はペロンが帰還し大統領として復権した暁にはすべてが上手くいくという期待を持っていたのである。ペロニスタ左派と MSTM は、手紙によるペロンとの親密な交流から、ペロンから完全な支持を得ているのは自分たちであると確信し、彼の復権後にはペロニスタ左派が社会革命を主導し、国家社会主義が達成されると信じていた。

ペロニズム支持を表明し、ペロン帰還を切望していたのは、主にブエノスアイレス圏内の司祭たちであった。ペロン党の勢力圏であるブエノスアイレスで活動する司祭たちは、様々な経路からペロニズムに触れ、この世俗の政治イデオロギーを司祭運動の根幹に据えることを良しとしたのである。しかし一方で、地方の貧しい農村や独自の発展を遂げた地方工業都市の MSTM 司祭たちにとっては、ペロニズムは馴染みのない政治思想であり、ペロン支持を主張する首都圏の同労者たちに違和感と反発を覚えたのも当然のことであった。主義思想の異なる MSTM 司祭たちは軍政という共通の敵によって一致し、抗議・要求運動を展開してきたが、軍政崩壊とペロン帰還の可能性が高まるにつれて、その結束は脆くも崩れていった [Dodson 1974: 63]。

またこの頃、MSTM に対するメディアの攻撃は激しさを増しており、MSTM は社会革命を支持するマルクス主義集団であり、カトリック教会内の分裂の原因であると非難されていた。メディアの注目を集めていたのは、前大統領暗殺事件で逮捕されたカルボネ司祭や、モン

トネーロスと関わりを持つムヒカ司祭ら数名であったが、このことはMSTMにとって大きなマイナスであった。知名度の高いMSTM司祭のラジカルな行動は、大会で決議された「選択の自由」に基づいた個人としての活動であったが、人々からは組織的な行動とみなされたのである。その結果、MSTMは好戦的で過激な司祭集団として、カトリック教会内のみならず、アルゼンチン社会においても孤立を深めていった。

#### 4-2 ペロニスタ左派の追放

激化する軍政の暴力によって、多くのMSTM司祭が逮捕され、拷問を受けていた。しかし司教たちは事態の深刻さを認識しながらも、沈黙を守り続けていた。カトリック教会からの庇護が得られないMSTMは、このような事態はペロンの帰還とそれに続く大統領選挙によって収束すると信じていた。MSTMとペロニスタ左派にとって、ペロンの復権は社会革命と国家社会主義の成立を意味していたのであり、自分たちがペロン自身によって追放されることになろうとは知る由もなかった。

1971年以降、ゲリラ組織の活動が盛んになり、アルゼンチン全土で暴動が起きていた。ペロニスタ過激派のモントネーロスは大学生やスラム住人を扇動しながら、勢力を伸ばしていった。モントネーロスの協力を得たペロニスタ左派は、その翌年、大統領選挙に向けたキャンペーンを全国規模で展開し、10万人を越える一般大衆を動員した。このキャンペーンの成功によって、ペロニスタ左派はペロン党内において圧倒的な存在感を示すようになり、来る大統領選とその後訪れる民主政権での活躍が期待さ

れたが、古参のペロニスタ右派からは危険視されるようになっていた [Gillespie 1982: 119-122]。

その頃、MSTMはペロン帰国に向けての準備を開始していた。1972年11月、二人のMSTM司祭（一人はムヒカ司祭）が、アルゼンチンに一時帰国するペロンを迎えるために旅立った。司祭に付き添われてアルゼンチンに戻ったペロンは、1955年に追放されてから18年ぶりに祖国の土を踏んだのであった。帰国した翌月、ペロンはMSTM司祭60名をブエノスアイレスの自宅に招き、自らの政治構想を語ったが、その内容は司祭たちを失望させるものであった [Seisdedos 1999: 97]。亡命時代、国家社会主義を熱心に説いていたペロンの姿はもはやなく、軍部や国内における支配集団との融和が、彼の最大の関心事となっていたのである。

ペロンの代理人カンボラの大統領就任により、ペロン党が再び政権を握ったのは1973年5月のことであった。ペロニスタ左派であるカンボラ政権は、外資系銀行の国有化など左翼的政策を進めたが、ペロニスタ右派からの反発は強く、党内における両派の抗争は激化していた。そして同年6月20日、エセイサ空港に降り立ったペロンの目の前で、ペロニスタ左派の根絶を謀る右派による襲撃事件が起こり、300名を超えるペロニスタ左派が犠牲となった。この事件の責任を問われたカンボラは大統領を辞任し、9月には第三次ペロン政権が発足したが、ペロニスタ右派を恐れたペロンはモントネーロスを非合法化し、党内から左派を追放したのであった [Burdick 1995: 192-196]。

#### 4-3 MSTMの終焉

ペロンの大統領就任に対するアルゼンチン司教団の見解はおおむね好意的であり、教会が保持してきた権益が尊重される限りは、ペロニスタ政権を支持することを表明していた。軍政樹立当初はオンガニア政権を歓迎した司教団であったが、その大規模な人権侵害と社会混乱を目の当たりにしてからは、民主政権による社会平和の実現を期待するようになっていた。

1973年8月には、MSTMの第六回全国大会が開催されたが、これが全国規模での最後の大会となった。今大会は政治の現在と教会の立場を熟考することを目的としていたが、会議は紛糾を極め、MSTM内の分裂は決定的なものとなった。決裂の最大の要因は、「ペロニズムのための選択」をめぐる司祭間の意見の相違であったとされる。翌月に発足する第三次ペロン政権がペロニスタ右派政権となることは明白であり、資本主義再生を掲げるペロンの下では、社会革命はおろか、国家社会主義が構築される可能性は無に等しかった。MSTMは第三回全国大会以降、国家社会主義はペロニズムを通してのみ達成されうると強調してきたが、この主張が見当違いであったことは明白であり、多くの司祭がMSTMを脱退するという事態を招いたのであった [Dodson 1974: 69-70]。

MSTMの分裂はもはや歯止めが利かなくなっていた。メンドーサ州やコルドバ州の教区グループは、ペロン党内からすでに排斥されている武装グループを支持し、大規模な革命運動を求めている。また一方では、西欧で拡大するカトリック教会の世俗化運動を支持するグループが現れ、司祭の独身制度廃止や教会ヒエラルキーの破壊を要求した。さらに、司祭個人の

「選択の自由」が、今大会において地域・教区グループにまで拡大されたことにより、教区グループが非合法ゲリラ組織を支持するのも、独身制度廃止運動に参加するのも自由となったのである。この時点において、MSTMは組織としての拘束力と存在意義を完全に喪失していた [Burdick 1995: 198-200]。

労働組合、軍部、そしてカトリック教会という保守勢力を味方につけ、大統領に就任したペロンは、亡命時に示した急進的姿勢を一変させ、ペロニスタ左派とMSTMの排除を公言するまでになった。テレビのインタビューで「もし司祭が政治をしたいのなら、カソック（聖職者の制服）を脱ぐべきだ。そうでなければ、政治から手を引いて福音宣教に従事すべきである」と非難し、MSTMとの関係を完全に断ち切ったのである。ペロンの変心はMSTMにとって致命的な打撃となり、その終焉はもはや時間の問題であった。

1974年5月、MSTMの中心人物であったムヒカ司祭が暗殺された。これは極右の準軍事組織アルゼンチン反共産主義同盟（AAA）による犯行とされ、MSTMの終わりを象徴する事件であった。その二ヶ月後にはペロンが死去し、アルゼンチン社会はますます混迷の度を深め、悲惨な軍政時代（1976-83年）へと突入するのである。

## 5 「聖」と「俗」のイデオロギー融和の失敗

ペロニズムが現代の要求する方法であると信じたMSTMは、この世俗イデオロギーを通してキリストの福音を世に伝え、神の国の実現を

めざした。しかし、MSTMの分裂と衰退の最大原因は司祭らがペロンを頭とするペロニズムを過大評価し、支持を続けたことにあると考える。ここでは、MSTMが試みた「聖」と「俗」のイデオロギー融和がなぜ失敗に終わったのか、ペロニズムの変質と、乖離する聖職者像とMSTM司祭という二つの点から探る。

### 5-1 ペロニズムの変質

ペロニズムはペロン政権のイデオロギーであり、その誕生はペロンが大統領に就任した1946年とされる。1943年の軍事クーデターを契機に政治の表舞台に登場したペロンは、労働政策を通じて労働者の熱狂的支持を獲得し、3年後の大統領選に勝利を収めた。ペロン政権がとった政策は、「フスティシアリスマ（正道主義）」と「第三の立場」というイデオロギーによって表される。フスティシアリスマとは、国内における労働者階級の社会的・経済的地位の向上を正当化し、対外的には国際社会におけるアルゼンチンの地位の向上を要求するものであり、「社会正義、経済的自立、政治的主権」という政策路線に集約されていた。しかし、実際の政策はペロンが掲げた理想とはかけ離れたものであった。

ペロンはまた、物質主義と精神主義、個人主義と集団主義といった互いに対立する概念の間で調和を求めていく立場を第三の立場と呼んだが、「国家はそれらを均衡させるために、その時々々の状況に応じて、右に寄ったり左に寄ったりしなければならなかった」[Goldwert 1972: 105]と記されるように、必ずしも両極から等距離に位置することを意味しなかった。このように、ペロニズムのイデオロギーは成立当初か

ら曖昧さを有していたが、その曖昧さゆえに、ペロニズムは国民の広範な階層に訴えかけることができたともいえる [待寺 1977: 64-65]。

その後、ペロンが1955年のクーデターによって国外追放され、1973年に帰国するまでの18年間にペロニズムは大きな変質を遂げた。1955年以降の軍政が徹底したペロン党排除を進める中、多くのペロン党員が急進化しペロニスタ左派の結成に至った。そして、アルゼンチン国内におけるペロニスタの左翼化に伴い、当時国外にあったペロンも次第にその主張を急進化させ、社会主義への傾斜を強めていったのである [松下1987: 205-209]。1968年の著作でペロンは、ペロニズムの社会主義的性格を強調し「フスティシアリスマはキリスト教的な民族主義的社会主義にはかならない」[Perón 1968: 182]と断言した。ペロン自身の急進化はペロニズムの変質を肯定するものであり、ペロニスタ左派とMSTMがこれを歓迎したのは言うまでもない。

労働者偏重から社会主義へと自らの主張を大きく変えたペロンであったが、それは1955年以前の伝統的ペロニズムの否定を意味するものではなかった。その証拠に1973年の帰国後、党内におけるペロニスタ右派の優勢を理解したペロンは、ペロニスタ左派とMSTMを排除し、それまでの社会主義支持の主張も影を潜めた。左右へと大きく揺れるペロンの姿勢は、時々々の状況に応じて立場を変える第三の立場そのものであり、彼の優れた人心掌握戦術ともいえる。人心を掴むことが政治において最も重要であると理解していたペロンは、亡命中もペロニスタ左派、右派それぞれと密に連絡を取り合い、帰国後の足場を固めていたのである。

MSTMの悲劇は、自分たちこそがペロンの

信任を得ていると信じ、イデオロギーに固執しない大衆政治家ペロンを十分に理解していなかったことに起因する。MSTMにとってのペロニズムは、あくまでもペロニスタ左派の信奉する社会主義的ペロニズムであり、伝統的ペロニズムではなかった。仮に、ペロニズムが内在的矛盾と曖昧さを孕んだイデオロギーであり、ペロンが変身を厭わない人物であると理解していたなら、MSTM司祭たちはペロニズムとペロンにキリスト教的な国家社会主義の構築という過剰な期待を寄せることはなかったであろう。

#### 5-2 乖離する聖職者像とMSTM司祭

第二バチカン公会議の理念に感銘を受け、「貧しい人々と共に歩む」ことを決意した司祭たちは、司祭運動を通してアルゼンチン社会の変革をめざした。人々のペロン崇拜を知ったMSTM司祭たちは、民衆を社会運動に動員するためにペロニズムを用いるのが有効だと考え、「ペロニズムのための選択」というスローガンを掲げたのである。これは、人々と連帯するためには彼らと同じものを信奉するという単純なロジックに基づく行動であり、人々を厳しく扱うのではなく慈しみをもっていやすというヨハネ23世の提言を實踐しているようにもみえる。しかし、民衆がMSTMに理解を示したのは活動開始から2年という短い期間であり、MSTMが最も重視していた人々との連帯は、それ以降弱の一途をたどった。MSTMから民心が離れた理由はなんであったのか。MSTMが急進化するにつれて、聖職者に対して人々が抱くイメージと実際のMSTM司祭とのずれが大きくなったことによると筆者は考える。

第二回MSTM全国大会で確認された基本合意において、MSTM司祭がとる立場については次のように記されている。「我々はキリスト者であり、司祭である。キリストは民を隷属から解放するために来られ、その業を教会に委任された。我々は第三世界に連帯し、彼らの必要に仕えることを願う。我々は拡大する資本主義構造と経済的・政治的・文化的帝国主義を拒絶し、新しい人の到来を促進するラテンアメリカの社会主義を探求する」[Seisdedos 1999: 84-85]。この文書を読めば、MSTMが政治的イデオロギーを持つ司祭集団であることは瞭然だが、一般大衆がそれをどこまで理解していたかは不明である。人々の関心はむしろ、MSTMが困窮する自分たちのために何をしてくれるのか、という非常に現実的なものであった。それゆえ、1968年に貧困と不平等に苦しむ人々のために立ち上がり、オンガニア軍政に抗議したMSTMは「キリストの弟子」(現代世界憲章)として、人々の目に好ましく映ったのであった。

しかし、運動開始からわずか2年後の1970年、事態は一変した。モンテネーロスによるアランブル前大統領暗殺事件への関与を疑われたMSTMは、メディアから激しい攻撃を受けるようになったのである。この年の6月1日から8月15日までに書かれたMSTMに関する新聞雑誌記事を見ると、6割以上の記事が直接または間接的にMSTMを非難したものであった[CIAS 1970: 40-43]。それにもかかわらず、軍部に射殺されたモンテネーロスの青年リーダー2名の葬儀においてムヒカ司祭は「彼らは若者の見本である」と述べ、エバ・ペロンの懺悔聴聞司祭を務めたベニテス司祭は「彼らは国家に

殺されたのです。主よ、この二人の若者を感謝します。彼らは安易な道を選ばなかったのです」と祈祷した [Buenos Aires Herald 1970]。彼らのモントネーロスに対する支持と暴力奨励ともいえる発言により、MSTMはさらなる窮境に陥ることになる。

当時、ゲリラ活動に従事していたMSTM司祭は少数派であったが、MSTMに対する人々の嫌悪感を募らせるには十分であった。聖職者は聖性を保つべきであるという不文律が広く浸透するアルゼンチン社会において、殺人や暴力への関与は司祭にあるまじき行為だったのである<sup>(10)</sup>。MSTMは人々のために働くことを放棄した血なまぐさいマルクス主義集団という烙印を押され、最後までその否定的なイメージを払拭することができなかった。

第二バチカン公会議のスローガンである「現代化 (アジョルナメント)」をMSTMはその活動において体現したが、人々の意識は公会議以前と大きく変わっておらず、MSTM司祭らの変質についていけなかったのではなからうか。しかし彼らの変質は、独身制度廃止と構造的教会の破壊を求めたヨーロッパの司祭らの変質とは根本的に異なっていた [グティエレス2000: 107]。

MSTM常任事務局であったベルナッサ司祭はフランスの司祭運動 (Exchanges et Dialogue) に宛てた手紙で次のように書いている。「我々の主なる目標は、我々の聖職者たる地位に終止符を打つことではなく、ラテンアメリカの革命のプロセスに司祭として関与することでありませぬ。(中略) 教会こそが、この解放を宣言し、支援しなければなりません。そしてこの教会は、民衆の目には常に司祭のイメージや役割を

通じて見えてくるのです。(中略) 我々は司祭職の有効性をいたずらに低めようとは望んでもいないし、教会は民衆の意識化に大きな影響力を有していると信じています」 [Enlace 1970]。この手紙は、MSTMが独身制度廃止を求めることによって司祭職の聖性を放棄し、同時に教会ヒエラルキーを否定するつもりはないことを明言している。しかし革命を謳うことによって、民衆の目にMSTMが「逸脱した司祭集団」として映り、司祭職の有効性を失い、教会ヒエラルキーから排斥されることになるとは予想していなかったのであろう。

もうひとつ、MSTMが民衆の支持を失った原因としてあげられるのは、MSTMとアルゼンチン司教団間の激しい対立である。MSTMはその活動開始から終了まで一貫して、自らをカトリック教会内の働きとして位置づけていた。そしてMSTMメンバーはそれぞれ司祭としてカトリックヒエラルキーに属し、司教などの高位聖職者に従うことを旨としていた。しかしながら、「選択の自由」をもつ各司祭や各教区グループは、自分たちの活動を禁じる保守派司教を公に非難し、コリエンテス州では大司教の告訴を試みたMSTM司祭が破門されるという事件まで起こっていた。そして、MSTMがペロニズム支持を公言するようになると、それまでMSTMを擁護していた少数の司教たちの賛同も得られなくなり、司祭運動としての正当性を疑問視する声内外で高まっていったのである。

MSTMは貧しい人々と共に生きることを決意し、それを実践しようと試みたが、急進的ともいえる彼らの思想と行動は人々が聖職者にもつイメージを覆し、民衆の支持を失う結果を招

いた。人々と同じであろうとするあまりに、聖職者としての聖性が疑われたことは皮肉であり、聖俗分離を求めたのが司祭ではなく、世俗の人々であったことは非常に興味深い。

## おわりに

第二バチカン公会議において、カトリック教会は貧しい人々と共に歩み、彼らが求める世俗の方法によってキリスト教の信仰を表現することを宣言した。アルゼンチンの司祭運動であるMSTMはその理念を具現化しようと、ペロニズムという政治イデオロギーを通してアルゼンチン国家の変革をめざしたのである。しかしMSTMの政治化は、軍政による弾圧、司教団との対立、そして民心の離反を招き、内的には修復しがたい分裂を生んだ。その後、頼みの綱であったペロンからも拒絶されたMSTMは、成立からわずか6年で活動停止となったのである。MSTMがめざした「聖」と「俗」のイデオロギー融和の失敗は、ペロニズムの変質と民心の離反に起因するものであったといえよう。

[投稿受理日2012.8.24/掲載決定日2013.1.24]

## 注

- (1) ピオ9世の回勅(1864年)の付属文書が「現代誤謬表」であり、汎神論、社会主義、共産主義、経済的自由主義、政教分離、出版の自由など80の主義主張を現代の誤謬として糾弾した。
- (2) 教会憲章第三章の司教職についての記述では「奉仕する」「仕える」という言葉が5回も使用されている[松本1990:60]。
- (3) 大統領夫人となったエバはその地位を利用して、エバ・ペロン財団を設立し貧困者への福祉活動に従事し、貧困層からの絶大な支持を得ていた[Seisdedos 1999:76]。

- (4) 1945年神学校で学ぶ聖職志願者は60名であったが、66年には10名に減少した。また、1956年から66年までに約200名の司祭が聖職を辞した[Enns 1971:31]。
- (5) 1934年にプエノスアイレスで開催された第32回国際聖体大会においてカトリック教会と軍部の結びつきが強まり、これ以降、国家指導者がカトリック教会による正当性の付与を求めるようになった[Klaiber 1998:69-70]。
- (6) キリスト教基礎共同体とは、構成員であるカトリック信徒たちによって運営され、共に祈り、聖書を読みながら、信仰と日常の生活を結び付けて現実の問題解決のために団結して行動する場である[ソプリノ1992:189]。メデジン会議で承認された後、1970-80年代をピークにブラジルや中米で拡大した。構成員が社会運動や反政府運動(内戦や革命を含む)に参加することも多く、エルサルバドル内戦ではロメロ大司教らが殺害されたほか、ラテンアメリカ各地で革新派聖職者の弾圧が行われた。なお、解放の神学はキリスト教基礎共同体における実践から生まれたものである。
- (7) 当初ヘラは解放の神学の推進者であったが、アルゼンチン司教団の支持を得られず、1970年代後半には解放の神学を变形させ文化的側面を強調した神学を提唱した[Coblin 1992:447-51]。
- (8) ペロンからの手紙は1969年5月(第二回大会後)にMSTMへ送られたものだが、世間一般に公開されたのは1971年であった。MSTM批判が拡大する中、ペロンとの友好関係を示すことによって運動の正当性を示し、民衆の誤解を解こうとしたものと考えられる。
- (9) 1971年に逮捕された司祭は52名にのほり、MSTMに賛同しない司教たちまでもが不当な逮捕に対して抗議した[Burdick 1995:183-187]。
- (10) 他の事例としては、1976-83年の軍政時代に司教団が大規模な人権侵害を黙認したことにより、カトリック教会が人々の信頼を失ったことがあげられる。

## 参考文献

- グティエレス, グスタボ. 2000. 『解放の神学』 関望, 山田経三訳, 岩波書店  
 ソプリノ, ジョンSJ. 1992. 『エルサルバドルの殉教者』 山田経三監訳, 拓植書房

- 南山大学監修. 1969. 『公会議解説叢書 6 歴史に輝く教会』 中央出版社
- 1986. 『第2バチカン公会議公文書全集』 サンパウロベリマン, フィリップ. 1989. 『解放の神学とラテンアメリカ』 後藤政子訳, 同文館
- 待寺俊治. 1977. 『アルゼンチンにおけるペロニズムの形成と発展』 上智大学イベロ・アメリカ研究所
- 松下洋. 1987. 『ペロニズム・権威主義と従属—ラテンアメリカの政治外交研究』 有信堂高文社
- 2004. 「低下しつつある労働運動の政治力」 松下洋, 乗浩子編 『ラテンアメリカ政治と社会』 新評論
- 松本三朗. 1990. 『神の国をめざして—私たちにとっての第二バチカン公会議』 オリエンズ宗教研究所
- Bresci, Domingo and Roland Concatti, eds. 1972. *Sacerdotes para el tercer mundo*. Buenos Aires, Publicaciones del Movimiento.
- Buenos Aires Herald. 13 de junio, 12 y 15 de septiembre de 1970.
- Burdick, Michael A. 1995. *For God and the Fatherland: Religion and Politics in Argentina*. New York, The State University of New York Press.
- CIAS. *Los Sacerdotes del Tercer Mundo y la Prensa nacional argentina*. August-September 1970.
- Coblin, José. 1992. "The Church and Defence of Human Rights." in *The Church in Latin America: 1492-1992*. edited by E. Dussel: New York, Burns & Oates, 435-454.
- Di Stefano, Roberto y Loris Zanatta. 2000. *Historia de la Iglesia Argentina: Desde la Conquista hasta fines del siglo XX*. Buenos Aires, Mondadori.
- Dodson, Michael. 1974. "Priests and Peronism: Radical Clergy and Argentine Politics." *Latin American Perspectives*. Vol.1, No.3. 58-72.
- Dussel, Enrique. 1981. *A History of the Church in Latin America: Colonialism to Liberation (1492-1979)*. Translated by Alan Neely. Michigan, William B. Eerdmans Publishing Company.
- Enns, Arno W. 1971. *Man, Milieu, and Mission in Argentina: A Close Look at Church Growth*. Michigan, William B. Eedmans Publishing Company.
- Gill, Anthony. 1998. *Rendering unto Caesar: The Catholic Church and the State in Latin America*. Chicago, The University of Chicago Press.
- Gillespie, Richard. 1982. *Soldiers of Peron: Argentina's Montoneros*. New York, Oxford University Press.
- Goldwert, Marvin. 1972. *Democracy, Militarism and Nationalism in Argentina 1930-1966: an Interpretation*. Austin, University of Texas Press.
- Klaiber, Jeffery, S.J. 1998. *The Church, Dictatorships, and Democracy in Latin America*. New York, Orbis Books.
- MSTM (El Movimiento de Sacerdotes para el Tercer Mundo). Entre septiembre de 1968 y junio de 1973. *Enlace*. 28 números.
- Perón, Juan Domingo. 1968. *La Hora de los pueblos*. Buenos Aires, Editorial Norte.
- Seisdedos, Gabriel. 1999. *Hasta los Oídos de Dios: La historia de los Sacerdotes para el Tercer Mundo*. Buenos Aires, San Pablo.
- Turner, Frederick D. 1970. *Catholicism and Political Development in Latin America*, Chapel Hill, University of North Carolina Press.